

編集後記

○第四輯には、「世界宗教者倫理會議の開催に向つて」副島廣之、「イソベ氏の信仰」鎌田純一、「東嶽 宮地殿夫の玄学研究」(前編)小林健三の三氏の稿を主論文として、附録に『三條私解』『三條述義』の二篇を副へた。

○三篇とも原稿を読んでみて、編者は勢くとも大いに得る点もあり感想も湧く。一言陳べて読者と偕に味読したい。

○副島稿。昨年七月パチカンを会場にして日本神仏界代表として徳川宗教統理、葉上照澄比叡山延曆寺長蘆以下十五名(副島氏を含め)と、パチカン側は諸宗教連絡聖省セルジオ・ピネドリー枢機卿を始めとして専門家数名と、加へて在ローマ駐在ユダヤ教會議代表フリッツ・ペーカー博士が、日本カソリック諸宗教連絡委員会から田中健一委員長らが出席して開かれた(開催地名から「ネミ」會議といふ)。

○「ネミ會議」の内容についての報告は本稿に譲る。本稿は本會議の特徴を三つに纏めて例示した。第一の項中に、ピネドリー枢機卿が霧島神宮社前の、この地に皇孫瓊瓊杵尊降臨し世界を護る、との徳富蘇峰の詩碑の一文を示し「素晴らしい言葉だ。私はこちらにキリスト教と日本の諸宗教との接点を見た。神(ゴッドなるべし)は決して人間から離れた別なものでもなく、天は地から距つてもゐない……」と述べたそうだ。これについて筆者はかやうなカソリックの姿勢に「新鮮な驚きを覚えざるを得なかった」と率直な感銘を吐露してゐる。小生も同様驚歎した。と同時に戦後のカソリックの動向及び日本人カソリック作家遠

藤周作氏や井上洋治神父、坂本堯上智大学教授らの著書を読んだ者の一人として、最近の外人神父、学者らのものをみてさもあるべしと反省もする。

○同じキリスト教徒でもカソリックとプロテスタントでは違ふ。戦時中蒙古の徳王来日の折、「蒙古在住の日本人と内地の日本人とは違ひますな」との言葉を想ひ出す。

○新教牧師でも外人の宣教師は、どうも日本人牧師とは違つて、我々の土着信仰神道に深い理解を求めようと努力してゐる感が深い。形而上学流に純粹培養された神学を額面通り信者に説く以上、芥川竜之介ではないが、イエスは神祇の中に組み込まれてのみ生きつゞける他はない。

○愚見! 痴言! 御叱正を乞ふ。

○小林稿。数少い宮地殿夫の研究である。教示の点が頗る多い。小生も宮地殿夫については興味を懐いて多少紹介の勞をとつたことがある。しかし学説・学系等については皆目無知であり本稿によつて概略の知識を得たことは収穫だ。

○宮地殿夫の名を知つたのは学生時代。昭和八・九年頃。当時の研究の一つの課題は外国人は神道をどのやうに理解し評価を下してゐるのかとの究明であつた。サイド・ワーク的に機会ある度に原書等を購入し、折りに触れては読むが、研究といふ程の努力は払はなかつた。それでも英・独・仏等のものはボツ／＼蒐まる。戦後になつて(戦前にも機会があつた)、依頼のまま原稿にし、不本意ではあるが『異邦人の神道観』と従前の原稿を纏め公刊した(昭和四十九年白帝社刊)。

○この中で宮地殿夫の神道観の僅少分は紹介した。本書はパン

フレットの如き菊判仮綴じの三十三頁のもの。『外人の問に答へたる神道』(大正元年刊)と題す。東洋の孤島後進弱小国日本が大國シナを降し、擧猛な熊ロシアに一撃を加へた。かかる奇蹟を出現せしめたものは、世界に類例なきもの、神道たるべし、と一英國人ゴルドン夫人は確信し单身来日して研究に従ふ。この奇篤者に嚴夫が講じた速記が本書である。

○鎌田稿。古代伊勢国度会地方に居住して神宮に奉仕した氏族「イソベ」氏が、神宮奉仕以前に仕へてゐた史実の研究の一部。イソベと名乗る集団の本貫地の伊勢国に皇大神宮は鎮座せられる。時代は垂仁天皇二十六年、諸国遍歴のうち大御神の神意のままに、この地に奉斎。四八二年後に丹波国から大御神の御心によって豊受大神を迎へられた。

○この伊勢国は従来から無人でもなく、荒地でもなく、前代から既に住者が居を構へ生業を営んでゐた地であることは明か。田畑は開墾され漁撈は勿論狩猟によつて先住者は生計を立ててゐた。とすると祠の有無に不関、信仰の存在は当然認めざるを得ない。この先住開拓集団がイソベ集団であつて、このイソベ集団の奉斎神と大御神奉斎との史実の究明は、それなりに神道史上の一大課題といへる。

○同時に神社神道史上の問題でもある。神社乃至神道の起原を縄文時代にみる人もをるが、果して妥当か。祈年祭・収穫祭の春秋二季の祭祀を無視して今日まで生きつゞけてゐる神道・神社は語り得ない点が認められるならば、縄文起原説は謬見であらう。本稿はこの点の理解を与へてくれる。

○第四輯の発行は遅延した。編者の陰陽不調による百余日の入

院のため事務中断、延々今日に到つた点は各位に御迷惑をおかけした。陳謝して御寛恕を乞ひたい。(安津)。

— 昭和五十四年六月記 —

神道研究紀要〔第四輯〕

昭和五十四年八月三十一日発行

会費年一、〇〇〇円

編集兼
発行者

東京都渋谷区代々木神園町一―一
明治神宮教學部内
加藤玄智博士記念学会
代表者 伊 達 巽

郵便番号 一五―一
電話番号 東京三七九―五五―一
振替口座 東京九一四二五九三番
印刷所 明德印刷出版社